

いのちの絶対価値(マルコ 3:1-6)

せっかく信者になったのに、何かの利害関係に絡まれるとすぐにつまずきます。また、プライドに触れるとすぐに争いに走ったりもします。それで人がどうなのか、条件、状況、環境がどうなのかなどを理由にして落胆したりすることがしばしばあります。信者なのにそれらのことを私がこうするしかありませんという理由として取り上げます。しかし、その裏を返してみますと、実は信者がいのちの祝福とその価値に無知なのでそうならざるを得ないということに気づきます。あるいは、いのちの祝福とその価値に鈍いのが本当の理由だということに気づいて、また認めなければいけません。今日の聖書の箇所には、そのいのちの価値に全く無知なパリサイ人たちが、命を助けようとしていらっしゃるイエス様を訴えようとする場面です。そこでイエス様は怒りを覚えて、安息日に命を助けることと律法を守るからといって人を見放してしまうこととどちらが正しいのかと逆に訴えられて病氣の人をいやされました。いのちの祝福に無知なことがどれほど愚かなことで、また恐ろしい勘違いに走るしかないのかということに改めて確認しなければなりません。

1. その第一が、いのちの絶対必要とその絶対価値を知らないと、人はいのちの他に違う何かに命を懸けて人生を棒に振る、むなしいことになってしまいます。別の言葉では違う何かに執着することで人生を棒に振ることになってしまいます。

神様は人を造られたとき、最初に他の被造物、動物とは違って神のかたちに造られました。それは他の動物にある普通に息をして生きて行くという命、日本語で言いますと漢字の「命」です。それプラス、人間にはもう一つのいのちが与えられました。日本語の聖書から言いますとひらがなの「いのち」です。他の動物には犬や猫、どんなに賢いチンパンジーにもない人間だけに許されているもう一つのいのちがあります。たましいが与えられて霊のいのちというものが許されました。それで人間はただの被造物、あるいは動物とは絶対言ってはいけないうし、神のかたちと言われることになりました。その霊のいのちというのは、人を造られた時に人間だけに特別に神様が鼻に息を吹き込んで、つまり聖霊の働きによって人間になったと言われています。つまり霊であられる肉眼には見えない創造主の神様が人間の内側に住まわれて、人間と一緒におられることになりました。これが霊のいのちです。そして、肉のすべてのことは、霊のいのちによってつかさどることになります。これが人間の本来の姿です。誰も分かっていません。このいのちを失った後、その状態で全人類が生まれるので、このようにいのちがあるかどうかとも知らないまま生きています。つまり、世界中のすべての人が、千差万別なんでしょうけれども、共通点は1つの命しか持っていません。これが人類の悲しみであり不幸でした。人間というのは2つの命があって霊のいのちがあり、神様がともにおられる存在であり、だからこそそこにのみ真の幸せがあり、真の安らぎがあり、また勝利の力があり、真の成功の人生がそこにありました。それがいのちというものです。しかし、残念ながら人間が罪を犯してこのいのちを失うことになります。創世記2:17には、善悪の木を食べると、あなたがたは必ず死ぬと神様が断言されました。しかし、悪魔の誘惑に負けて、この神様のみことばを破って、人はその木の実を取って食べてしまいました。その結果、宣言された通りに人間はその場で死んでしまいます。私たちがいのちと思っている、イメージしているものから考えると、死んだのに息をして生きているから、死んでないかのように思うかもしれません。2つの命があるので、その瞬間、霊のいのちが死んでしまいます。しかし、肉の命はまだ維持され、1つの命しか持たないまま人生を生きることになりました。その瞬間、言われた通りに霊のいのちが死んでしまいます。つまり、神の霊が人間から離れてしまうことになりました。それをローマ6:23には、「罪から来る報酬は死です」と言われています。罪を犯した結果、皆が死んでしまいました。でも、皆が息をしてご飯を食べて歩いて生きているから、自分は生きているというふうに勘違いしているのですが、実は死んでいるのです。エペソ2:1には、自分の罪と罪過の中であって死んでいた者であってと言われています。アダム以来、全人類が生まれながら死んだままの状態生まれることになりました。息をしているにもかかわらず死んだと聖書には明確に宣言されています。誰もこの奥義のことは分かっていません。だから、皆勘違いして人生を生きているわけです。このように神様が人を離れることになり、1つの命、動物と同じ命しか持たないまま生きるようになった、それを死と言います。その死んだということはどういうことなのかと言います

と、ヨハネ8：44、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者」であると書いてあります。人生の支配者、主人が変わってしまいます。悪魔が支配することになりました。これを死と言います。なので当然、エペソ2：3、生まれながら神の御怒りを受けるべき子らとして生まれた、これが死んだということです。生まれて息をしていて才能もあり、自分なりに夢を持って真面目に頑張っているかもしれませんが、神様に祝福されるべき人間が神の御怒りを受けるしかない存在になってしまいました。これが死んだということです。生きているから生きているというふうに勘違いしないように。ヘブル9：27、霊のいのちが死んでしまった結果、肉の命も結局死を迎えるようになります。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」。これが死です。死んだ後、肉の命が終わった後、裁かれて地獄に行く運命にとらわれることになりました。このようになったことを死んだと言います。なので死ぬ前に生きてる間に当然、死んだままの状態です。人生そのものが苦しみの人生になってしまいます。精神的に苦痛を覚えて、心の苦しみを覚えて、人生そのもの、あらゆる部分が壊れていくようになってしまいます。そして一生、死の影に制せられて人生を生きるしかありません。ひとりも例外はありません。当然、何が希望なのか、何が本当の幸せなのかも知らずにさまよいの人生を歩くしかありません。これが死んだ者の人生の姿、あり方です。だから宗教を求めるようになり、偶像を拝み、シャーマンに頼るようになり、その宗教と偶像とシャーマンなどから得られる効果を瞬時に得られるものが麻薬なのです。そういうものに安らぎを求めてさまようしかない、そういう人生を歩くようになってしまいました。なぜでしょうか。死んでしまったので他に道がありません。間違いであり、結局はむなしくなるしかないものなのに宗教を求めて偶像に拝み、シャーマンに頼り、麻薬に溺れたり執着するようになる、そういう人生になってしまいます。だから、右に転んでも左に転んでも、結局、最終的にはむなしい人生を歩くしかありません。結局、自分中心、目に見える肉がすべてで、この世に溺れてむなしくなる人生になります。人生が終わる頃には誰一人としてむなしくならざるを得ません。なぜなのでしょう。死んでしまったからです。でも誰も自分が死んだと思う人はいません。息をしているから生きているというふうに皆が勘違いしているのですが、聖書だけが人間のその真相について暴いて私たちに知らせていっしやるわけです。これが死んだまま生まれて、死を抱えて人生を生きて、最終的には滅びるしかない運命を抱えて生きる人間の姿であります。人はいのちが与えられていたのに悪魔に惑わされて罪を犯した結果、いのちを失い、どんなに暴れても不幸から逃げられない人生に転落してしまいました。だから、人間に何より必要なものはいのちなのです。しかもいのちが必要なだけでなく、人間にはこのいのちが絶対必要なのです。しかし、大学の教授は専門の知識は教えることができ得るかもしれませんが、いのちをもたらすことは不可能なのです。カウンセラーはその人の心理的な部分を触ることはありかもしれませんが、いのちをもたらすことはできません。お医者さんも政治家も福祉関係の人もありがたい様なことがあるかもしれませんが、また子どものために命を捨てる覚悟を持って子どもに愛情を注ぐ親でも、それがありがたいことに間違いありませんけれども、いのちをもたらすことは不可能なのです。人間に絶対必要なものはいのちなのに、このいのちはどこに行っても得られません。何をどうしても得ることができません。いのちはいのちの主である創造主の神様のほかに与えることができません。幸いなことにその神様が私たち罪人を、死んでしまった人間を愛していのちを約束されました。創世記3：15、女の子孫が生まれて、蛇の頭を踏み砕く。その女の子孫、キリストが来られることで、いのちを取り戻すことができるよ。それがなければ成功したってむなしいし、頭が良い人間、善良な市民として頑張ったとしても最終的にはむなしいことになるのでいのちが必要なんだよ。私があなたがたにいのちを与えようと女の子孫が生まれて、蛇の頭を踏み砕くよ。いのちが何かも知らずに死の力に捕えられている悪魔の頭を踏み砕いていのちを取り戻すよ。キリストのほかにいのちはありません。そのキリストが世に来られました。十字架で死なれて復活なさったイエス様がキリストであり、イエス様がそのいのちの主なのです。ヨハネ6：53「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうち、いのちはありません」。どうすればいのちに預かることができるのでしょうか。真面目に頑張れば、修行すればよいのでしょうか。とんでもありません。逆にむなしくなってしまいます。悪魔の騙しごとなのです。世の中のすべての理論は、いのちとは全く無関係であり、無縁なものしかありません。イエス様はヨハネ11：25-26でこのようにおっしゃいます。「イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」。肉の命が死んでも霊のいのちがそのまま生きているわけですから。「また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか」。イエス・キリストを信じる者は、永遠

に死ぬことはありません。イエス様が永遠のいのちですから。息絶えることがあっても、それは肉の命が終りを迎えるだけであって、肉の命は一度限りのもので、結局は土に戻るものなのです。それに命を懸けて執着して人生を棒に振るといことが仕方がなくいのちを失った人間の有り様なのです。そこにいのちであるキリストであるイエス様が来られました。私がいのちなんだと。ヨハネ 14:6「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」。イエス・キリストを通して失われたいのちを取り戻し、神様が私たちの内側に戻ってこられることとなります。安息日というのは、このキリスト・イエスの中にあっいのちが得られるんだ。そして、そのいのちから真の安息、安らぎを回復するようになるよという宣言、メッセージなのです。それが安息日です。つまり、安息日はイエス・キリストの日であり、いのちの日なのです。なのに安息日を命がけで守っているにもかかわらず、いのちと全く関係ないパリサイ人はいのちを消そうとするわけです。なんと恐ろしいことでしょうか。このようにいのちの必要、いのちの絶対価値が分かっていないと、他の何かに命がけで執着するようになり、人生は滅びるようになるしかありません。例えばパリサイ人の場合、律法に命を懸けました。律法は人にいのちをもたらすものではありません。今のことで置き換えて申し上げますと、道徳、倫理に命を懸けます。道徳、倫理がいないという意味ではありませんけれども、それは命を懸ける執着するものではありません。そこにいのちが生まれるわけではないので。でも、いのちの絶対価値、霊的事実が分かっていないと、仕方がなく他の何かに執着するしかありません。ある人は何かの思想に命を賭けます。イデオロギーに執着するようになります。世の中に私たちが執着すべきものなど本当にあるのでしょうか。ある人は人の愛情に執着します。親が子どもを愛することは当然なことです。しかし、それと執着とは別の話です。たとえ親に子どもに何かがあったとしても、それに縛られることなどは執着しているからなのです。なぜ執着するのでしょうか。いのちの絶対必要とその価値にまだ目覚めていないからです。仕方がありません。そこに悪霊が入り込んで、そういうふうにするからです。ある人はお金に人生を懸けます。お金のために強盗に走ったり、お金のために詐欺に走ったり。そこまで言わなくてもお金の人生を懸けてお金のために笑ったり泣いたり執着してしまいます。お金のことで自分で命を絶ってしまう人間もいます。なぜでしょうか。いのちの必要と価値が分かっていないからです。そして、そういったものが総合してひとりひとりに自分のポリシーができてしまいます。その自分のポリシーに人生を懸けてしまいます。自分の何かの主張、頑固さ、絶対譲れませんというものを持っているのです。私もまだまだなのですが、どんどんと自分の意見、自分の主張、自分の感情でさえ、相手にならないもの、それはいらぬ、私はそういうのではありません、と言いたくなります。なぜそれに執着するのでしょうか。なぜ自分の主張にそんなに執着するのでしょうか。いのちと何の関係があるのでしょうか。いのちを知らないといのちの価値が分かっていないと仕方がなく、何かに囚われるようになるしかありません。ある人は伝統に命を賭けます。守るべき伝統もあるでしょうけれども、伝統が私たちにいのちをもたらすものではありません。また逆の面から、結局は同じ話でしょうけれども、心の傷に命を賭ける者もいます。それに執着して一歩もそこから出ようとしません。自分なりに苦しみながら精神的にダメージを受けていながらもそれにしがみついて執着するのです。なぜでしょうか。残念なのは、今申し上げました内容はいのちのない人のお話なのに、クリスチャンからも見られるということです。いのちの価値と祝福に鈍いからです。だから皆さん、あだこうだと頭を複雑にしないでください。「神様。イエス・キリストにあるいのちの価値といのちの必要について目覚めるようにしてください」と祈ってみてください。聖霊が御座の祝福が皆さんの思い、考え、たましいに臨まれ動きますとそのようになります。今まで気づいていなかったのに気づいて、「なんで今まで心の傷に執着していたんだらう」と不思議に思うそういう時が来ますので、ぜひ祈ってください。何に執着するのでしょうか。どんなに良いもの、必要なものであっても、人間が命がけで執着するようなものはこの世には存在しません。2部の礼拝でも申し上げるつもりですが、24時の世界には私たちが命がけで執着すべきものなどは存在しません。だから、皆縛られてしまうのです。皆引っかかってつまづいてしまいます。超越できないのです。いのちの価値、その必要が分かっていないとこのようになってしまいます。

2. 二番目です。当然、命がけで執着していたものが、いのちの登場によって正面から否定されるようになります。そうするといのちを潰しにかかってくるわけです。

そこまで行ってしまうのです。その人が命がけで執着していたものが道徳的に悪いものなのか良い

ものなのかなどは関係ありません。イスラエルの人々は律法は神のものだと思い、命を懸けていました。いのちとは関係なく。この「いのちとは関係なく」の「いのち」はひらがなです。それで「律法に命を賭けていた」の「命」は漢字の「命」です。命がけで執着していたものが正面から否定される時に、いのちを潰しにかかってくる。イエス様が安息日に神様が望まれるいのちの働きをして、パリサイ人たちは正反対だったので、それが真っ正面から否定されると、どうやってこのイエスを殺すことができるかということを考え始めることになりました。それがいのちの必要と価値が分かっている結果なのです。なんと恐ろしいことでしょうか。今までの歴史がずっとそのことの繰り返しです。一番最初、カインがいのちあるアベルを殺してしまいました。自分が否定されるから。悔い改めていのちの祝福に預かるべきなのに、悪霊に取りつかれていると逆効果になり、いのちでないものにこだわっていた自分がいのちによって否定されるようになります。それはチャンスではないでしょうか。なのにアベルを殺してしまいました。今まで自分がこだわって執着していたものを命がけで守るために。それが歴史の繰り返しです。ヨセフの兄たちは、契約といのちとは全く関係ない人生を歩いていました。その中で唯一、ヨセフがいのちの祝福の奥義に目覚めていたわけです。それがもう目障りで目障りではない兄たちはヨセフを殺そうとし、結局は奴隷として売ってしまうこととなります。同じパターンです。サウル王は悪霊に取りつかれているいのちがないから、自分の王座、今まで自分が守ってきたものが脅かされると勘違いし、いのちあるダビデを殺そうとして、ダビデが死の影の谷を歩くような人生の原因となってしまいました。もちろん、そのすべてが神様の導きの中にあるものではありませんけれども、必ずこのようになってしまいます。恐ろしくないでしょうか。カインはアベルを殺しましたが、実は神様を殺そうとしたわけです。神様は殺されないから。サウル王もダビデを殺そうというつもりだったでしょうが、それは神に敵対することなのです。今日の聖書から見られるように、パリサイ人たちはいのちのない人々で、自分が命がけで守っていたものを守るために、いのちそのものであるイエス様を殺そうとし、結局、十字架で殺してしまいました。その後、パリサイ人と同じユダヤ教は、このイエス様を信じていのちを回復しているマルコのタラップンの教会、初代教会をこのまま放っておくわけにはいかない。彼らが真理であり、いのちであれば、私たちはなんなのか。私たちの今までの命がけで守ってきたものを守るためには、初代教会を潰すしかない。それで初代教会を潰そうとしました。もちろん潰しました。でも潰されません。その後、初代教会がこのいのちの祝福から遠ざかるようになり、新たに生まれた宗教団体がローマ・カトリックです。そこで神さまはルターを始めとしていのちの祝福を回復して改革を始めました。するとローマ・カトリックは、ルターを始め、改革教会を潰しにかかって殺してしまいました。でも、殺さずに今に至って、私たちがイエスはキリストと告白することになりました。そして、その宗教改革の後、ずっと時間が流れて今現在、世界中でキリスト教会という看板を抱えている中で95%以上は、すべての宗教に救いがあるということに賛同してその団体に加入されているものなのです。そして、残りの5%ぐらいの教会も主に強調することがいのちではなくて道徳と倫理なのです。そういうときに神様は必ずいのちの祝福を回復させて、神様のご計画を曲げないで世界福音化を全うしていかれる方です。それが歴史なのです。そうすると必ず異端の汚名をかぶせて潰しにかかってくるわけです。それほどいのちの絶対必要とその価値が分かっていると恐ろしい結果になってしまいます。文字通りにサタンの道具となってしまいます。

ということで、私たちは今日の聖書の箇所を通して、改めて心から決心しましょう。自分の中でいのちでないものへの執着があれば、どんなものであれ、その執着を捨てましょう。もう一度言います。24のこの地上の世界で私たちが命がけで執着すべきものなどは1つも存在しません。それが家族であれ、人の愛情であれ、国であれ、どんな思想であれ、伝統であれ、ありません。そこにいのちをもたらすものは何一つ存在しないのでその執着をすべてやめましょう。そこからUターンしていのちの祝福に、ひらがなのいのちの祝福に集中しましょう。そして、そのいのちの祝福を喜びにしましょう。他のなにかで喜んだり、悲しんだりではなくて、いつまでもともにおられるキリストの血によって回復できた、いつまでも変わることなく私のものである永遠のいのちの祝福を喜びにしましょう。そしてそれを味わい、それをおあかしして行くことを自分の人生にしましょう。いのちの祝福は簡単に申し上げると、キリストを受け入れたことで、キリストの中であってキリストが私の内側におられることで、私の人生において不幸や問題すべてはもう終わったというのがいのちの祝福なのです。同時にキリストが私の内側にいらっしゃることで、三位一体の御座の祝福が私のものになっているということです。地上のものに振り回されなくてもいい御座の祝福の主人公になっているのです。今まで

は石ころでどんな石が大きいかわかるとか形が良いかで泣いたり笑ったりしていた者が、ダイヤモンドになりました。これでも相応しい例えにはなりません、その御座の祝福を持つようになったので、地上のどのようなものもそれに振り回される理由など消えてなくなりました。それに集中しましょう。393が私のものであるのです。それに集中しましょう。たとえ死の影の谷を歩いているときでも、濡れ衣を着せられて人に無視されたそのときでも、地上のものに執着してつまずいたり、泣いたり、怒ったり、争ったりしないで393に集中しましょう。そうするとそのすべてに答えが見えてきます。そういう霊的狀態を形成することで、そういうクリスチャンが現場に行ったときに、その現場にいのちが絶対必要だ。この絶対をまず覚えて、それを基準にして、優先して聖霊の導きを受けるようにしましょう。これが私たちの道徳なのです。道徳のルールに従ってではなくて、だから大抵のことは全部譲り、全部受け入れて、全部許して、超越していくようになります。なぜなら絶対があるわけですから。いのちが絶対なので。皆さんの学校に会社にその地域にいのちの必要が絶対なので、それをメインにして導きを受けるとなれば全部譲り、負けて、損してということになるでしょう。だから肉しか分からない24の世界しか分かっていない人から見たときにはアホじゃないのと思われまふ。だから皆現場ではアホになりまふ。なぜでしょうか。大学院生が幼稚園生と一緒に関わって喧嘩しない、そういう原理です。それ以上です。天のものを持っているものが地上ものと一緒にそれをテーマに争ったりすることは恥ずかしいことです。全部譲っても私にはイエスのいのちがあります。イエスのいのちは私の宝です。それでこのようなみことばが私に成就するようになるでしょう。ピリピ1:10「あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく」。真に優れたものを見分けること。譲って許して損を受けて、真に優れたものを。御座の祝福を24時味わうことにより、そういうことが可能な力が生まれることとなります。今までの自分が殺されて、毎日自分を殺して、キリストが生きるそういう御座の祝福に預かるようになります。そういういのちが私たちにありますので。

改めていのちの絶対必要、いのちの絶対価値をメインにして、超越の勝利のクリスチャンになりまふ。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。礼拝を捧げてる兄弟姉妹にいのちの絶対必要とその価値に目が開かれて、霊の目が開かれて、そのいのちの祝福に集中することによって、超越のクリスチャンとして現場で証人として用いられるようにひとりひとりをかえりみてください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン